

2021年度紅梅会役員・委員

会長	(66)	茶園 美香	編集委員	(学3)	☆濱館陽子	研修委員	(学14)	☆波多野智咲
副会長	(87)	添田 英津子		(学14)	☆大久保笑美		(学15)	☆星野志穂
書記	(短10)	神尾 有佳	準備委員	(学14)	☆江川成美	推薦委員	(短10)	◎長谷川香
	(学1)	田村 紀子		(学15)	☆中川萌		(学11)	村野かやの
会計	(学13)	☆大貫 果子		(84)	◎江河都美		(学11)	平田万智
	(短6)	白石 綾子		(短9)	新藤香織		(学10)	◎石川恵理香
会計監査	(学13)	☆山岸 遙香		(短9)	赤木紀子		(学10)	加藤未奈
	(70)	立川 臣子		(学5)	☆星野真理子		(学1)	☆櫻井真理子
編集委員	(短9)	☆稲葉 英梨子		(学12)	大和田紗代		(学12)	☆宮本紗代
	(学15)	◎香村 侑稀		(学4)	◎小柳 淳		(学12)	☆濱田ひとみ
	(学14)	☆吉田 遥		(学5)	天野秀基		(短2)	船江裕美
	(学15)	☆飯塚彩花		(学13)	高山実幸			

() : 卒業生 ◎ : 委員長 ☆ : 新役員・委員



第112号



会長あいさつ

66回生 茶園 美香

新型コロナウイルスワクチン接種が進み、感染者数が激減しほっとしておりますが、オミクロンの急激な増加に心配と不安な日々が続いています。そうした中でも最大限の注意を払いながら日々を過ごされていることと思います。同窓生の皆様は、コロナ渦の中、再びさまざまな場で懸命に活躍されています。感謝とともに、エールをお送りします。

さて、今年度の書面総会の審議事項にご回答、近況や病院で働いている方へのメッセージもありがとうございます。すべての審議事項に賛同を得、今年度の紅梅会の事業を進めております。結果の詳細は、「書面総会報告」(p.2)をご覧ください。

審議事項の一つであった「慶應看護100年記念看護医療学部学生奨学金」について正式に設立し、2022年度から授与することを決定しました。対象は看護医療学部の1年生～3年生とし、一人に10万円、1年間に2名の方に授与します。選考方法は、指定した書類と「私が、慶應看護医療学部で学ぶことと将来の展望」のレポートを提出してもらい、1次審査は書類選考、2次審査では紅梅会役員による面接を行うことにしました。2021年秋から募集を開始し、現在2次審査を行っております。このための資金は、紅梅会の会費および皆様からいただきましたご寄付により運営します。

今後の総会・研修会の開催方法については、皆様からお寄せいただいたご意見を参考にしながら、新型コロナウイルス感染症の状況に対応した方法を検討してきました。この2年間で、Webを使うことのメリットを感じる一方、対面で行う良さを一層強く感じました。両者の良さを合わせて、ハイブリッドで開催する方法も視野に入れて考えてきました。しかし、再びの拡大により、今後の状況を見通しながら、対面あるいはWEBで実施する準備が難しいという判断に至りました。残念ではありますが、2022年度の紅梅会総会も昨年同様、書面総会にすることにしました。ご理解ください。

新型コロナウイルス感染症に対してのワクチン接種実施の中、慶應義塾では、私立系大学としてはいち早く伊藤公平塾長および、北川雄光常任理事(前慶應義塾大学病院長)の指揮のもと職域接種が行われました。今回は、医学部、薬学部、看護部、三四会(医学部同窓会)、KP会(薬学部同窓会)、保健管理センター、事務部門の方との協働での取り組みになりました。これに際して、6月伊藤塾長、北川理事、加藤恵里子看護部長を通して依頼があり、紅梅会会員に職域ワクチン接種への協力を要請しました。募集はホームページおよび口コミ、SNSを使いました。短期間で多くの会員の方々から申し込みがあり延べ1,300人が協力しました。三田キャンパスの教室を会場とし、6月21日～9月3日まで合計約98,000人に接種が行われました。接種対象者は、慶應義塾の教職員と同居家族・学生、さらには、他大学の学生でした。詳細は、北川常任理事の寄稿をご覧ください。

協力者の中には、子育て中で久しぶりに仕事をする人、非常勤務の中で時間を調整して参加した方もいました。新しいワクチン接種に対して不安を感じている方に、みなさん短い接種時間の中でも笑顔で、丁寧な言葉かけをし、不安を和らげながら接種されていました。慶應で身につけた看護の心が存分に発揮されていました。協力者からはワクチン接種を通して、慶應義塾や社会に対して貢献できてうれしいという感想を聞きました。紅梅会としてもこのような大規模接種に協力できたこと、さらに、慶應義塾のみならず、他大学の方々に対しても接種できたことについて、社会的な役割を担えたことを大変誇りに思い皆様に感謝申し上げます。

接種会場では、マスクをしている中でも懐かしい顔を見つけて、会員同士が業務の間のわずかの時間に、近況を報告し連絡先を交換する場にもなりました。

新型コロナウイルス感染が一日も早く、収束することを願い、皆様のご健勝をお祈り申し上げます。(令和4年2月)

紅梅会事務局よりお知らせ

1.住所・氏名等の変更は、次のいずれかの方法で必ず事務局までご一報ください。

①メール・郵送・FAX

②登録変更フォーム

紅梅会ホームページはコチラから



住所変更フォームはコチラから



事務局在室時間: 木曜日 10時～16時
(状況により在宅勤務および出勤日を変更することがあります)
長期休み: 夏休み8月、年末年始2週間程度
メールアドレス: koubaikai.1934@gmail.com
直通電話・FAX: 03-3341-8116

寄付者 次の方にご寄付をいただきました。心より感謝申し上げます。さらに充実した紅梅会活動をするために、有効に活用させていただきます。

2020年度

芦澤淑子様(厚女35回生)100万円、
佐々木ミツ様(厚女34回生)他21名

2021年度

各務千枝子様(厚女34回生)10万円、
佐々木ミツ様(厚女34回生)他1名

ご寄付は随時受け付けております。
引き続き、一層のご支援をお願いいたします。

「特選塾員推薦」受付中

2001年4月から今までに261名の方が紅梅会推薦により特選塾員として承認されました。推薦をご希望の方は下記の項目を明記して、紅梅会事務局に郵送・メールまたはファックスでお送り下さい。なお不明なことは紅梅会事務局にお問い合わせください。

1. 氏名・ふりがな・生年月日
2. 現住所・電話番号
3. 回生または卒業年月
4. 学歴(高校以降)
5. 職歴

訃報

2021年12月31日現在

23回生、助21回生 中鉢 美津子	2021年4月3日	43回生 黒田 知恵子	2021年3月16日
36回生 倉持 レイ子	2019年2月15日	54回生 松尾 嵯都子	2019年12月8日
36回生 渡辺 敏江(旧姓法華)	2020年12月31日	54回生 小市 ツネ子	2021年12月18日
37回生 荻野 俊子(旧姓塚越)	2021年3月10日	61回生 堀越 雅子	2019年12月24日
37回生 初山 節子(旧姓四日市)	2019年10月3日	64回生 北村 京子	2021年3月29日
39回生 有路 ミチ(旧姓蕪沢)	2021年5月4日	81回生 小荷田 富子(旧姓山口)	2020年1月17日

訂正とお詫び

会報111号に掲載しました訃報の日時に間違いがありました。訂正してお詫びいたします。
62回生 原 美貴子 (誤)2019年1月31日 → (正)2019年8月31日

編集後記

昨年に引き続き大変な社会情勢の時にも関わらず、皆様の多大なるお力添えをいただき、第112号会報を発行することができ、心から感謝しています。葛藤や不安を感じながらも、様々な場所で奮闘される同窓生の活躍を知り、私自身も自分ができることに力を尽くしていきたいと思えました。まだまだ予断を許さない状況ですが、皆様のご健康をお祈り申し上げます。

編集委員長 学15回生 香村 侑稀

第112号の 主な内容

◆中鉢美津子さんを偲んで	2	◆前紅梅会事務員の挨拶	10
◆今年度書面総会の報告	2	◆東京オリンピックを経験して	11
◆2020年度収支決算報告・2021年度予算	3	◆2022年度紅梅会総会、研修会について	11
◆看護医療学部長の挨拶	4	◆2021年度度紅梅会役員・委員	12
◆看護医療学部生の活躍	4	◆紅梅会事務局よりお知らせ	12
◆看護部だより	5	◆2020年度・2021年度寄付者	12
◆慶應義塾における新型コロナワクチン職域摂取のご報告と御礼	6	◆特選塾員募集のお知らせ	12
◆コロナ渦で活躍する同窓生	7～9	◆訃報	12
◆2021年慶應連合三田会大会について	10		

会報發送者数X,XXX名(2022年1月31日現在)

23回生 中鉢美津子さんを偲んで

50回生 三浦 英子

中鉢美津子さんは、1942年(昭和17年)から1988年(昭和63年)定年退職までの長きにわたり、慶應義塾大学病院看護部の改善・向上に大きく貢献をされました。退職翌年の1989年が平成元年ですから、第二次世界大戦以降の激動の昭和を、波濤を凌いでいくかの如くの在職46年間ではなかったかと思えます。そしてこの間に、紅梅会会長として6年間、ご尽力いただいております。

中鉢美津子さんの看護師としての出発点は、ビルマ(現ミャンマー)での医療活動からです。終戦一年前の1944年に外務省の外郭団体により、ビルマ派遣診療防疫班が結成され、慶應義塾医学部も医師・事務職・看護師で43名のメンバーを編成。卒業後2年目の中鉢美津子さんもその中の一人でした。

衛生状態は悪く、資材は次第に乏しくなる中で傷病兵・在留日本人・現地の人達への医療活動を展開。戦況悪化のために翌年の1945年4月下旬、傷病者を引率しながら現地を立退。荒野の中の無数の死体を目にしながらの帰国途中に射撃を受け、慶應の編成隊員から数名の死傷者がでました。10ヶ月余りの過酷な救護活動でした。

帰国後は外科病棟に勤務。新制度の看護教育の整備のため1950年からは厚生女子学院勤務となり36回生を担当。その後、外科病棟の主任、師長を歴任されております。

戦後の大きなうねりの中、看護を模索していた時代には、師長として人事師長として、元看護部長松村はるさん(10回生)を支えてこられました。問題意識で波瀾にみちた看護界の中で、当時の慶應看護部は痛みを伴う変革に果敢に取り組み、他病院看護部へ進むべき道筋を示した時代でもありました。

その後、1969年から1988年の看護部長としての19年間は、医療制度の変化、労働運動、看護体制の刷新、新棟開院(現2号館)

等々の取り組みに、気の休まる時のない日々であったかと思えます。その中であって常に、労をいとわず、言葉より行動、献身的で無私無欲、利他の心の人でした。

「忙しくて大変」と言っただけでは、日本に帰ることの出来なかった、あのビルマで出会った人達に申しわけないですよ」と。心の奥底に張り付いて離れない物をお持ちでした。

2015年、介護付き有料老人ホームで中鉢さんにお目にかかったのは、ご退職後27年目のことでした。柔和な笑顔と丁寧で静かな話し方は以前のままでした。

車で30分位の距離でしたので、買い物の帰りに立ち寄っていました。麴甘酒をミキサーで飲みやすくして、夏は冷やしてゴクゴクと、冬はフーフー吹きながら、会話少なくて二人座ってニコリするだけの面会でした。

6年余りのホームでの静穏な日々でした。

享年98才でした。

謹んでご冥福をお祈りいたします。



保助看法施行30年記念表彰式にて



病院にて

2021年度(第78回)紅梅会書面総会報告

2021年度の総会は、新型コロナウイルス(COVID-19)の感染発生状況を踏まえ、書面総会といたしました。5月12日に書面総会資料と承認ハガキをお送りし、624通の返信をいただきました。

1. 審議事項について

表のような結果で、すべて承認されました。

審議事項	承認数(名)	不承認数(名)
2020年度収支決算報告・会計監査報告	624	0
2021年度事業計画について	623	1
2021年度収支予算について	622	1
2021年度新役員について	620	0

2. 総会・研修会のリモートについてのアンケートについて

参加181(31.1%)・不参加388(66.7%)の回答がありました。ご意見をもとに今後の総会・研修会の方法を検討していきます。

3. メッセージについて

150件の近況の近況メッセージをいただきました。コロナ禍で多方面(介護、訪問看護、保健所、厚労省、病院、助産院など)で活躍する紅梅会会員からの報告が多数ありました。それぞれの場所で苦勞、緊張、恐怖を抱えながらも、看護に誇りをもって頑張っている様子を知ることが出来ました。

また、慶應義塾大学病院の看護師を心配する、応援する、多くの声が寄せられました。特にこれまで慶應看護を支えてくださった先輩方の「看護師でありながら何もできなくて申し訳ない」「慶應ナースのことをいつも思っている」という声に心を打たれました。医療の最前線で、患者さんの看護に向き合う慶應看護師への「心からの尊敬」「私たちの誇り」「ご自分の体を大切に」「本当にありがとう」という声も多くありました。このようなお気持ちを看護部の皆様にお届けできればと思い、紅梅会では寄せ書きを作成し、加藤看護部長に贈らせていただきました。看護部長から病棟に共有いただいたとご報告を受けております。慶應義塾の同窓生のエールが、少しでも慶應看護師のエールとなることを願っております。文字が小さく読みにくいですが、寄せ書きの写真を載せておきます。



寄せ書きは
コチラから



2020年度収支決算報告・2021年度予算

(単位:円)

科目	2020年度予算額	2020年度決算額	2021年度予算額
1.事業活動収入			
1)会費収入	3,600,000	1,442,000	3,600,000
(1)終身会費	3,000,000	1,080,000	3,000,000
(2)年会費	600,000	362,000	600,000
2)総会参加費	0	0	0
3)広告料収入	35,000	15,000	35,000
4)寄付金収入	0	1,068,740	0
5)雑収入	2,000	1,877	2,000
(1)預金受け取り利息	2,000	1,877	2,000
(2)その他	0	0	0
事業活動収入計	3,637,000	2,527,617	3,637,000

科目	2020年度予算額	2020年度決算額	2021年度予算額
2.事業活動支出			
1)会議費支出	1,142,000	374,366	1,142,000
(1)総会関連費	680,000	360,642	680,000
(2)役委員会関連費	462,000	13,724	462,000
①役・委員会	200,000	3,192	200,000
②編集委員会	100,000	10,000	100,000
③準備委員会	40,000	0	40,000
④研修委員会	60,000	532	60,000
⑤役員推薦委員会	2,000	0	2,000
⑥ホームページ委員会	60,000	0	60,000
2)事業費支出	950,000	789,947	950,000
(1)研修会費	50,000	0	50,000
(2)会報発行費	900,000	789,947	900,000
3)管理費支出	1,230,000	755,207	1,250,000
(1)人件費	800,000	469,472	800,000
(2)通信費	200,000	207,380	220,000
(3)消耗品等費	180,000	48,725	180,000
(4)ホームページ業務委託費	50,000	29,630	50,000
4)看護医療学部支援関連費	140,000	100,914	140,000
5)連合三田会関連費	50,000	33,300	50,000
6)寄付金支出	0	1,000,000	0
7)予備費	60,000	528,525	105,000
事業活動支出計	3,572,000	3,582,259	3,637,000

看護医療学部長の挨拶

不確実な時代を生き抜く力

2021年度は、COVID-19感染症の第4波、第5波と緊急事態宣言に悩まされながらも前年度の実績もあり、学事には大きな影響を及ぼすことなく無事に終えることができました。

義塾では、伊藤公平塾長就任直後に政府から発表されたワクチン接種を強力に推進するための施策である、職域接種への参画をいち早く決断し、北川雄光常任理事の指揮のもとに準備を進め、6月から8月の延べ58日間で約5万人の接種が行われました。「塾生のキャンパスライフを取り戻したい」という塾長の熱い思いと共に、多くの塾関係者からその実現に向けて支援が得られたことにより実現しました。特に、実際の接種、接種後の観察と重要な役割を担ったのは紅梅会の会員の皆様です。接種会場では連日、茶園美香会長をはじめとした会員の皆様が手際よく、また優しく声掛けをしながら対応くださり、安心して接種を受けられたという声が多く聞かれました。この職域接種は塾生のみならず、ワクチン接種ができず海外留学を足止めされていた他大学の学生等も対象とし、「学生たちの未来」を拓く一助となりました。改めて皆様のご尽力に感謝申し上げます。

コロナ禍で、本学部の魅力の一つである海外研修科目を中止せざるを得ない状況であることについては前回ご報告させていただきましたが、協定を結ぶ海外の大学との交流の目玉となっている、短期留学受け入れプログラムについては担当者の努力により「高齢社会と看護職の役割」というテーマで、2020年度からオンライン開催することができました。対象大学は、学部とMOU (Memorandum of Understanding) を結ぶ、ウルチ大学(韓国)、復旦大学(中国)、サフォーク大学(英国)、ワシントン州立大学(米国)の4大学です。講義はオンデマンドで視聴し、時差があるためディスカッションの時間については、英国は早朝から、米国は夜間の遅い時間帯で計画しました。残念ながら米国では看護学生がワクチン接種の役割を担うため、参加を断念せざるを得ない状況でしたが、慶應を含む4大学の40名余の学生が参加しました。大学病院や訪問看護ステーションでの見学実習に代わり、加藤恵理子看護部長による病院紹介や病棟での看護や訪問看護の様子を映像資料として用いました。短い時間での

看護医療学部生の活躍

コロナ禍の活動で得た学び

米国には臓器移植を受けた子どもとご家族、医療者が集うキャンプがあります。オリガミプロジェクトとは、そのキャンプの中で看護医療学部の学生が行う「折り紙教室」です。子どもたちと過ごすことで、どのように自らの慢性疾患を受け入れ、生活しているのかを知る貴重な機会となっています。本年度のキャンプは新型コロナウイルス感染症の影響によりオンラインでの開催となったため、折り紙の折り方の動画を作成し子どもたちと共有しました。慣れない折り紙にも一致団結して懸命に取り組む姿があり、子どもたちの生活者としての姿や生活の場を垣間見ることができまし

看護医療学部長 武田 祐子



ディスカッションであっても最終日の発表からは、多くのことを感じ取りながら深い学びが得られていたことがわかりました。アンケートでもすべての学生から高い満足度が得られていました。この経験から、対面開催になった場合にも、オンラインによる講義や資料の共有により、日本への訪問期間中は見学体験やディスカッション・交流に集中できる、より効果的なプログラムの可能性が示されたように思います。

また、青田与志子様による学生の海外活動に対する奨学制度を、海外支援につながる国内活動についても活用させていただき、少人数ではありますが、海外の感染症対策や保健活動、海外支援団体の活動について深く学び、看護の役割を追究しています。世界的に閉塞的な状況に押しつぶされてしまいそうになりますが、将来の活動に向けて力を蓄える機会が得られていることに感謝いたします。

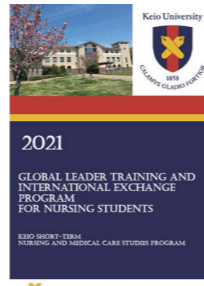
思いがけない状況に直面し、この局面をどうにか乗り越えようとする中で、これまでのあたり前や価値観を見直さざるを得ない状況でしたが、これからの不確実な時代を生き抜く力が少しずつ蓄えられてきているように思います。

キャンパスライフや社会活動が少しずつ取り戻されている状況の中、医療施設や地域で看護を学ぶ学生は、なおも厳しく自己の活動を制約しなければならず、その周囲とのギャップがより辛いものになるかもしれません。そこから病を持ちながら療養生活を送る人々の心情や、医療者としての責任について深く考え、成長していくことを願っています。

2020年度 国際看護実践1(国内) グローバルリーダー養成・看護学生国際交流プログラム(短期留学受け入れプログラム)



2021年2月1日～2月5日



Keio University Faculty of Nursing and Medical Care

た。この経験から私はオンラインとオフライン開催にはそれぞれ利点があり、目的に応じて開催方法を選択していくべきであると考えました。実際に医療の現場ではオンライン診療・面会など多様な選択肢が広がっています。今回学んだことを踏まえ、多くの人々に柔軟に医療を提供することができるようにこれからも学びを深めていきたいです。オリガミプロジェクトの動画です。

オリガミプロジェクト参加者
学部4年生 本間悠花、大河内優花、西島美来
学部3年生 齊藤さくら、久松遥、古家あいか、森脇舞

動画はコチラから



看護部だより

看護部長 87回生 加藤 恵里子

2020年度に引き続き、2021年度も新型コロナウイルス感染症への対応と特定機能病院としての診療機能の併存をいかに果たすかに直面した年となりました。患者さん、ご家族の方々には、感染管理にご理解を頂き、制限下で治療をお受けいただいております。病院教職員は、「かからない、持ち込まない、ひろげない」ために、業務中はもちろんのこと感染に留意した生活を送り続けております。

また、紅梅会の皆様には、2021年6月21日より58日間にわたり実施しました「慶應義塾新型コロナワクチン職域接種」におきまして、多大なるご協力をいただきました。お陰様で連日20名前後の看護師体制を組むことが出来、9万8026回接種の実績で終了できました。紅梅会の皆様の温かい結束を強く実感いたしました。あらためて厚く感謝申し上げます。以下に看護部の近況をご報告いたします。

1. 2021年4月看護師採用状況

看護部次長 短1回生 宗廣 妙子

新採用者:124名(うち男性看護師6名、経験者採用3名) 新卒看護師:121名(看護医療学部卒58名、他校卒63名)
出身校:北海道・東北11名(8.9%)、関東・中部88名(70.9%)、近畿・中国・四国12名(9.7%)、九州・沖縄13名(10.5%)

2. Tokyo2020オリンピック・パラリンピック大会開催への看護師派遣



オリンピック・パラリンピック

コロナ禍で開催された東京2020オリンピック・パラリンピック大会ですが、当院に隣接する新国立競技場では陸上競技や開閉会式が行われ、大会関係者や来賓、開閉会式出演者、また報道関係者などが集まりました。当院は大会組織委員会からの協力要請を受け、大会期間中、開閉会式のリハーサルを含めた延べ26日間、新国立競技場医務室医療スタッフとして看護師20名を派遣しました。競技場の中は大変広く時には大音響や暗い中、傷病者の場所特定がしにくいなど、病院とはかなり異なる状況や資材の中での活動となり苦労もありました。加えてコロナ禍における大規模会場での医療対応に緊張や不安を感じながらの業務でした。それでも、これまで数々行ってきたシミュレーション研修(救急蘇生や外傷、大規模競技場におけるイベント時の会場医療対応(ICEM)等)や自己学習を糧に、また同じく派遣スタッフである当院救急科医師や他院の医療スタッフと協力、支援し合いながらその役割を果たすことができました。

当時、院内ではCOVID-19支援チームや新宿区住民接種、職域ワクチン接種等も対応していましたので、リーダー看護師の派遣は看護部としても大変なことでしたが、各部署の理解と協力の中で何とか調整し大会に貢献できました。今回の医療スタッフ派遣は、当院としての救急医療対応のより一層の向上やBCP、災害対応の強化に繋がる経験となりました。

3. AIホスピタルモデル事業の実際

看護部次長 短1回生 矢崎 久妙子

現在、慶應義塾大学病院内では無人運転の車椅子や搬送ロボットが活躍しています。写真の「無人電動車いす」は病院利用の外来患者さんにご自由にお使いいただいております。この車椅子の導入は2020年9月からで、すでに4000名以上の患者さんにご利用いただきました。操作は至って簡単です。患者さんが車椅子に乗りタッチパネルを押すとゆっくりと目的地に向かって進み始めます。人が前に歩いていたり、他の車椅子が近づいてきたりしても自動で停止しますので、衝突事故の発生はありません。また、目標地点に患者さんが到着すると自動で停留所に戻ります。当初は物珍しそうに見ていた患者さんも、今は歩行者とともに動く車椅子は通常の光景となりました。



無人電動車いす

この取り組みは当院が2018年、内閣府の戦略的イノベーション創造プログラムの「AIホスピタルによる高度診断・治療システム」に採択され、実現可能なAIホスピタルモデルを構築することを目的にはじまった事業の一部です。近年、急速に進歩してきた様々なICT、AI(人工知能)技術を病院内に実装・統合し、実現可能なAIホスピタルモデルを構築することを目的に、院内では様々な取り組みが始まっています。皆様も慶應病院を訪れた際に、新たな慶應病院を感じる機会となることを期待しております。

慶應義塾 常任理事 北川 雄光



現在(2021年11月30日)、日本では新型コロナウイルス感染第5波が収束し、第6波の動向、オミクロン株という新たな変異株の流入を警戒している状況です。一方、職域接種を含め、日本におけるワクチン接種が短期間に一斉に行われたことは少なくとも現在の比較的安定した状況に一定の寄与をしているものと考えております。その中で慶應義塾における「5万人職域接種プロジェクト」も慶應義塾内にとどまらず一定の社会貢献ができたものと存じます。

慶應義塾職域ワクチン接種は全国に先駆けて2021年6月21日から開始され、のべ58日間で、49,320名に対して合計98,026回の接種を無事終えることができましたのも、紅梅会の皆様、慶應義塾大学病院看護部OB/OGの皆様のご尽力の賜物と心から感謝申し上げます。途中、製造過程における異物混入問題などにも遭遇しましたが、看護師、薬剤師の皆様が丁寧に観察を行いながらワクチンの充填を行って下さったおかげで重篤な健康被害もなく目標とする期間内に義塾関係者以外の学生さんなど約15,000人を含む50,000人近くの皆様に安全に接種できました。医師(のべ約600名)、看護師(のべ約1,300名)、薬剤師(のべ約500名)、事務部門(のべ約3,000名)など多くの皆様にお力添えいただきました。とくに看護師の皆様にはさまざまな業務に携わっていただき、中心的な役割を果たしていただきましたこと、伊藤塾長はじめ義塾法人執行部としても心から感謝致しております。

「全塾50,000人ワクチン職域接種」は、伊藤塾長が就任直後に、「学生の未来、正常なキャンパスライフを取り戻す」ことを目標に、他大学の留学予定者なども含めていち早く行うことを決意した重要なプロジェクトでした。しかし、コロナ診療やオリンピック・パラリンピック対応を抱えた信濃町キャンパスの教職員だけでは到底達成できない規模のプロジェクトでした。そうした状況で、茶園会長をはじめ数多くの紅梅会の皆様、慶應義塾

大学病院看護部OB/OGの皆様が、快く協力の意思を表明してくださいましたことで、迅速なワクチン供給申請を行うことができました。その後、ワクチン供給の相対的不足が発生し、多くの企業や大学で予定通りの職域接種を開始できない状況が発生し、皆様の「ご快諾」が大きな助けとなったことを実感しております。今回のプロジェクトでは、後輩たちを思う慶應義塾社中の皆様の温かさを身にしみて痛感致しました次第です。

今般の新型コロナウイルス感染症は現時点でまだまだ予断を許さない状況が続いておりますので、情勢を見ながら慎重に教育・研究活動の正常化を図って参ります。また、現在3回目の職域接種についての準備を検討しておりますが、慶應義塾として施行する場合には、可能な範囲で紅梅会の皆様、慶應義塾大学病院看護部OB/OGの皆様にもお力添えを賜れましたら幸いに存じます。

皆様から頂いた貴重なご支援を糧に今後も教育・研究・医療の新しい形を模索しながら努力精進して参る所存です。誠にありがとうございました。

2021年11月30日

慶應義塾でのコロナワクチン接種に協力して

78回生 熊本 恵美子

慶應義塾塾生および教職員対象の新型コロナウイルスワクチン職域接種に参加させていただきました。

新型コロナウイルス感染症発生以来、私にできることは自分が感染しない、感染させないことで医療に負担をかけないように自粛生活することくらいでした。医療逼迫の報道に触れる度に、何の力にもなれない申し訳なさを抱えていました。そんな中、この業務の一報は願ってもない事でした。

6月25日から8月25日に18回の就業で、薬剤の搬送、ワクチン接種、接種後の観察および体調不良者の搬送の業務を担当しました。筋肉注射やアナフィラキシーショックの患者さんを看たのは、思い出せないくらい以前のことで、やれるだろうか少し不安な気持ちで、動画を視聴しイメージトレーニングをして、かなり気合を入れて臨みました。

業務については、看護部の責任者の方に私の率直な意見を受け入れていただきました。接種を受ける、する人の安心・安全・効率的な改善が繰り返され、慶應義塾職域接種の体制への一体感や安心感、信頼感が増し、この体制が期間限定で終了するのがもったいないと思うほどでした。

また、懐かしい人々との再会は、この機会がなければ叶わなかったことです。温かく見守り育ててもらった恩師や苦楽を共にした同級生、慶應病院時代の職場の同僚や他職種の方との再会。「○○ちゃん」と呼び合う同級生同士の姿をみて、今は、跡形もなくなってしまった厚生女子学院の校舎や夜な夜な遊び歩いた学生寮での生活、水色のストライプエプロンの白衣と丸いナースキャップの実習生の頃が懐かしく思い出されました。次回は誰に会えるだろうかワクワク感がありました。

このように私にとっては、楽しく有意義な時間をいただいた働き甲斐のある業務でした。終了後には塾長からの感謝状(ペンの校章が入った賞状)が自宅に届き、驚き恐縮いたしました。

この場をお借りして、お世話になりました関係者の方々に御礼申し上げます。

慶應義塾でのコロナワクチン職域接種に参加して

短10回生 加藤 美江 (旧姓川辺)

この度、本校三田キャンパスにおいて行われたコロナワクチン職域接種に参加させていただく機会がありました。多い日には一日2500人を超える人数で、慶應の関係者のみならず、他大学の学生さんも接種に来場し、入学以降リモート授業中心であった学生さんにとって、キャンパスでの授業再開に向け、希望に満ちた接種となったことと思います。

暑い時期での接種であることや若い年代も多かったため、ワクチンに対する副反応対策のみならず、迷走神経反射を予防するために会場は寒いくらいに空調を調節し、接種後の待機会場ではリラックスできるような音楽をかける、不安のある方は臥位での接種や待機ができるようベッドを多く用意するなど様々な工夫がなされていました。

勤務しているクリニックでは、新型コロナ感染後、重症化しなくとも倦怠感や味覚、嗅覚異常が残る患者さんもおられ、感染予防に向け早急にワクチンを接種することの必要性を実感しておりました。今回のように、大学を通して若い世代にもワクチン接種の機会が迅速に与えられたことは、社会にとって大変意味のあることであったと思います。

最後になりましたが、大学病院退職後、15年以上振りにお会いした恩師の茶園先生や添田先生は、当時と変わらないチャームングさとハツラツきでおられ、一気に学生時代が思い出されました。このようなプロジェクトに参加させて頂き、感謝いたします。

Nurse for Nurse
Connect and Discover

看護職のための新しいキャリア支援がスタートしました!

nurseforurse.org

一般社団法人Nurse for Nurse (2021年9月設立)
メンバー: 門元記子・二田水彩・川添高志 (看護医療学部1期)

2022年 慶應連合三田会大会について

開催日は、10月16日(日)の予定です。新型コロナウイルス(COVID-19)の流行状況により開催方法が決まります。決まり次第ホームページなどでお知らせします。

コロナ禍で活躍する同窓生

慶應義塾大学病院コロナ病棟での経験

学15回生 山内 優実

2020年4月から約1年半、慶應義塾大学病院におけるコロナ病棟での勤務を経験しました。それまでは内科混合病棟で働いており、まだ未知の存在であった新型コロナウイルスが突然身近なものとなった恐怖で非常に動揺したことを覚えています。手探りで始まったコロナ病棟の運用でしたが、私たち病棟看護師、医師だけでなく、感染制御部をはじめとした他部署の支援を受け、少しずつゾーニングや感染対策のマニュアル化が進みました。病床数が増えた際にはCOVID支援チームとして来てくれた他病棟の看護師とも共同して働きました。また、精神科医や精神看護専門看護師で構成された心のケアチームは、コロナに罹患した患者さんだけでなく私たち医療者の精神面も気にかけてくれており心強かったです。感染予防策を徹底しながら患者さんと関わる中で、やはり通常の看護と同じようには行かない場面もありました。本当だったら直接手に触れたくても個人用防護具は外せず、ご家族の面会も思うようにできない中で、その人らしく最期を迎えるために医療者が今出来ることは何か、日々葛藤しました。患者さんが抱える苦痛に耳を傾け、少しでも安楽に過ごせるようケアするという基本がやはり看護師の役割として重要だと感じました。また、コロナ罹患前は既往もなく健康だった方が在宅酸素療法を導入して帰るケースが多くあったことも印象的でした。生活の変化を受容する過程を支えたり、退院後の生活を見据えて関わることで看護師としての視野が広がった気がします。この1年半の経験をまだうまく言語化できませんが、少しずつ消化しながら日々の看護に活かして行けたらと思っています。

高度救命センターにおけるコロナ禍でのベッドサイドケア

学14回生 新部 愛海(旧姓高橋)



私は神奈川県内のコロナ重症患者を受け入れる高度救命救急センターで勤務している。看護師2年目の2月、ダイヤモンドプリンセス号の患者を受け持った日から私のコロナ禍は始まった。病室に足を踏み入れると、ECMOと呼吸器の稼働音が鳴り響き、モニター音が耳についた。これだけの音に満ちていながらも、機密性の高さからだろうか、自分の呼吸音はやけにくっきり聴こえていた。当初はコロナに関する情報が少なく、PPEの隙間からウイルスが入ってくるのではないかと、ウイルスを持ち帰り家族に感染させるのではないかと常に不安が付き纏った。気づくと院内のシャワー室で皮膚が赤くなるまで体を擦っていた。それから日を追うごとに患者数は増加し、50件以上の病院から断られた患者が県外から搬送されてくる日もあった。刻一刻と医療体制が限界に近づいていると感じていた。

今日までのことを振り返ると、何より辛かったのは自分が実践している看護が本当に患者とその家族のためになっているのかわからなくなった事だ。会話ができていた方も数時間後、数日後にはECMOや呼吸器に繋がれ、治療の甲斐なく次々と亡くなっていった。新たな処置を行う度に救命であるはずの行為がどこか延命のようにさえ感じられた。ご遺体を納体袋に入れて送り出す時、最後に触れるのが私でいいのかと心苦しくなった。

現在でも、救急隊から「主訴は呼吸苦、発熱です。」という連絡が入ると緊張が走る。一日も早いコロナの収束を願うと共に、どのような状況下でも患者に寄り添う私でありたい。

子どもたちの笑顔は、私を前へ突き動かす

学11回生 岡部 卓也

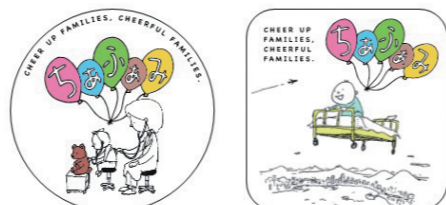
私は、2015年に学部卒業後、神奈川県立こども医療センターで小児がん患者を対象に看護師として勤務しています。担当する多くの子どもたちは、手術療法や化学療法、放射線療法あるいは造血細胞移植を必要としています。

新型コロナウイルスによる影響で、当院も面会を制限せざるを得ない状況に陥りました。入院中の子どもたちは、ただでさえ親やきょうだいと離れた環境で生活する上に、家族の時間がさらに制限され、とても苦しい思いをしてきました。

Aさんは、病棟の出口まで家族を笑顔で見送り、その後部屋に戻ると枕に顔を押し当てて声が病室の外に漏れないように泣いていました。Bくんは、家庭の事情で面会時間が短く、看護師と過ごす時間が長く、看護師が病室を離れようすると「また来る?」と、質問してきます。看護師が「また来るよ」と笑顔で答えると、Bくんも笑顔で頷きます。どんなに苦しく、辛い状況に陥っても、少しでも子どもたちに笑顔が生まれるように、日々関わっています。

2020年春からは、院内の有志で小児がん患者家族を応援するボランティア「ちあふあみ」を立ち上げました。医療では提供できない支援を、地元の企業や団体等から募り、きょうだいを含めた家族へ還元する活動を始めました。勤務時間外での活動のため、時間に制約はありますが、徐々に活動は広がりつつあります。

子どもたちの笑顔は、家族を笑顔にするだけでなく、医療者を前へと突き動かす力があります。これからも、子どもたちの「げんき」と「えがお」のために、「退かざる者は必ず進む」を胸に日々精進します。



COVID19 vs. 高齢者施設看護師

86回生 藤原 美裕紀



世界が未曾有の感染症の脅威に対峙して約2年。普段、創処置や一般健康管理などの通常業務を行っている施設看護師にも突然新たな任務が課せられた。新型コロナウイルスへの対策である。

特にワクチンも無い初期には、高齢者施設は死者・重症化を引き起こすクラスターの導火線の様にも思われたため、安寧な後方支援から一気に前線に押し出された歩兵の気分である。ご存知だろうが、施設には常駐医師は居ない。オンコールはあるものの感染が疑われる場合は往診自体ができず、発熱者は外部受診も断られる。病院の様な感染予防設備はなく、認知症や要介護者にソーシャルディスタンスなんて取りようがなく、目の悪い方には鼻先で、耳の悪い方には耳元での対応が必要で、入浴や排泄は体を密着させての移動や保持が必須。役所は「食堂にアクリル板を」など仰るが食事介助どうするんでしょう??

悪夢としか言いようのない状態だが、なりふり構わぬ感染対策に突入。面会抑制・外出や受診制限・外部サービス(理美容など)が停止された。同時に、毎日の全員検温、共有場所の換気・加湿・接触場所の消毒等が開始され、これらは現在も続いている。そしてやっとのワクチン接種。動きの悪い自治体を待たず、施設長を何度も市役所に派遣して接種券を何とかゲットし2回接種終了。ただここで最悪の5波襲来、万が一の時に隔離部屋を準備しガウンテクニックを指導。

これらの善戦により、施設利用者の感染は0。職員も家庭内感染と思われる数人が出ただけですぐに回復・復職を果たせたが…どうかこれで落ち着かれますよう。

コロナ禍での現場で痛感した『環境整備』の大切さ

89回生 関根 ひとみ

私は、これまで病院、企業での産業看護、学校保健などの現場で勤務する機会をいただき、現在は、居住している市の一次救急を担う夜間急病診療所で非常勤として勤務しています。

昨年のコロナ感染拡大時は、準備もないうまま同時進行で新しい感染対策マニュアルを作成しながらの勤務という状況下でした。また情報不足もあり、スタッフ間での未知のウイルスに対する恐怖感、不安感は相当のものでした。そして感染対策に対しても、看護師だけでなく事務員や薬剤師などの他職種間でもその温度差もあり、なかなか足並みを揃えてが難しい状況でした。いかにそれぞれの不安感や不明点を明確にしていくこと、こんな時であるからこそ、コミュニケーションを円滑にするためにそれぞれの思いを表出しやすい場をつくること、環境の整備の必要性を改めて痛感しました。また、感染対策に必要な物品も不足し、勤務の合間にビニール袋を切り貼りして防護服を作ったり、来院される患者さんのソーシャルディスタンスのために、ビニールテープで足型を床に貼り付けたりといった、あるもので必要なものを揃えるといった物品の整備も経験しました。

また、コロナ陽性者のホテル療養支援や、検疫の仕事で海外からの入国者へのサポートもさせていただきましたが、初めて招集されたメンバーで仕事を進めて行く中で、不安感の強い療養者の方々やスタッフ間に対する温かい声かけの重要性も痛感しました。コロナ禍を経験して、環境整備や声かけなどの看護の基本となるものの重要性も痛感したこと、そして改めて基本に立ち返ることの大切さも学べたように思います。



コロナ禍の保健所

学15回生 西野 恵

台東区に入区して保健師として働き始め3年目。現在は感染症の部署で働いています。コロナの感染拡大が起きる度に波に呑まれるように対応に追われる日々でした。

保健所では、患者さんの積極的疫学調査、入院等療養先の調整、自宅療養者の健康観察、感染拡大防止のための集団検査や接触者検査調整等の対応を行なっています。

病床が逼迫している時期には、入院が必要な患者さんの入院先が見つからず、多くの人が不安を抱えながら自宅で療養をせざるを得ない状況でした。重症化する自宅療養者の対応、言語や宗教の異なる外国人の対応、感染拡大が止まらないクラスターの対応等苦慮することがたくさんあったように思います。保健所内で、保健師同士・他職種で声を掛け合い協力しながら乗り越えられました。

病院で働く医療スタッフの方をはじめ、コロナ禍で大変な思いをされた方が多くいるかと思っています。皆様どうぞご自愛ください。

現在日本は落ち着きを取り戻していますが、南アフリカでは新たな変異株であるオミクロン株が確認され、感染拡大が起きている状況です。今後どのようにこのウイルスと付き合っていくことになるのか、まだ先が見えない状況が続きますが、地域の公衆衛生の維持向上のため、微力ながら尽力していきたいと思っています。

2021年慶應連合三田会大会について

2021年度慶應連合三田会大会での紅梅会オンライン同窓会を企画して

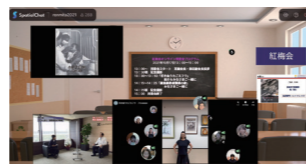
コロナ禍のため2年ぶりとなる連合三田会大会「みんなでみらいへ」は、10月17日にデジタル中心で開催され、世界中から約1万人の塾員が参加しました。そして、紅梅会も初の試みとなるオンライン同窓会を開催しました。

この企画は、茶園会長の「紅梅会でも何かできないか」の一言から始まりました。コロナ禍の折、私自身も2年ほど学友と会えていないことに気がきました。日常生活で様々な制限を余儀なくされている皆さまに、懐かしい学友との交流の場を作りたいとの思いに至り、大会本部主催のSpatial Chatを用いた同窓会企画への参加を決めました。

Spatial Chatは「距離」の概念を取り入れた新感覚ツールで、人に近づくと声が大きく聞こえ、遠くなると小さくなる特徴があ

ります。そこで歓談を中心とし、特別企画としてフラダンススクール校長の助川智代(88回生)さんを招き、振り付けていただいた「若き血うたごえフラ」を踊りました。また、「慶應看護100年」を振り返る貴重な映像や、北川雄光常任理事の「コロナと闘う慶應義塾大学病院」を紹介しました。さらに、「あなたの好きな慶應義塾の歌」の投票結果を中継し、「慶應義塾看護婦の歌」が8位となったことを参加者と喜びを分かち合い、会の最後に歌いました。日吉は、肌寒い雨の日となりましたが、遠くは名古屋や松本から十余名の方がオンラインで集って語り、歌って踊り、心身ともに暖まる時間となりました。皆さまのご協力に感謝申し上げます。

短大10回生 神尾 有佳



「若き血」で踊るフラダンス!! ~自分で自分を応援しよう~

88回生 助川 智代 (旧姓土屋)

20年ほど前から趣味で始めたフラダンスですが、現在はその楽しさと奥深さをひろめたくフラダンススクールの主宰しております。フラダンスは小さなお子様からご年配の方まで幅広い世代に人気があり、観ているだけで元気で明るい気分になります。そのため、介護福祉施設などへ慰問に伺うことも多く、そこでは、ご利用者様もいっしょに歌って踊れる「うたごえフラ」を楽しんでいただいております。

「うたごえフラ」は、懐かしい昭和の歌謡曲を大きな声で歌いながら、歌詞の内容に合わせたハンドモーションで踊ります。これは、高齢者介護などで用いられる音楽療法や回想法の要素を取り入れて考案し、リハビリテーション効果も期待できるとしてレクリエーションなどに役立てていただいております。

そして、この度、連合三田会をきっかけに、コロナ禍で疲弊しながら医療に携わる看護師の皆様「自分で自分を応援していただきたい」という想いから、「若き血」のうたごえフラを考えました。

実際に、オンライン同窓会では、動画をご覧いただきながら皆様に踊っていただき、初めましての方々とも楽しい時間を過ごせたことで、「若き血」の歌のチカラを改めて感じました。

医療現場では、依然として緊張感が続いておりますが、すべての言葉がポジティブであり、仲間と心をひとつに!! 前向きな気持ちになる曲「若き血」のフラダンスで、心身ともにリフレッシュしていただければ嬉しく思います。



前紅梅会事務員の挨拶

紅梅会事務に携わって

前任者から事務の仕事を引きつぎ20年もの年月が流れてしまいました。この間、多くの同窓生の方々に出会い、役・委員会メンバーに教え教えられて多くのことを学ばせていただきました。最初はパソコンの操作も言われたことだけしかできなかったのですが、役員の方々に教えられてWordもExcelも使いこなせるようになり、メールでのやり取りも普通のことになりました。最近ではコロナ禍で在宅ワークも経験し、リモートでの会議が常態となり、社会の変化にしっかりついていけるようになりました。おかげでリモートでの学会参加も躊躇なくできるようになり、私にとっては大きな収穫です。

事務をしていたことで実感したことがあります。会員の方と電話でお話ししたり、手紙をいただいたり、総会出席ハガキの近況等からも、院内外で活躍しておられる同窓生の様子を知る機会があり、日本各地でまた海外で活躍しておられる慶應看護の同窓生を知り、とても嬉しく誇らしく思いました。また、ご家族の方から訃報の連絡をいただいた時に「慶應で学んだことを誇りに思っていた」「慶應での学びや看護の仕事に誇りを大事にしていた」

などの言葉をいただくと、私自身も学生時代のことや、慶應病院や厚生女子学院で仕事をしていた時のことを思い出し、楽しく充実した日々であったと思えました。

昨夏、看護部の新型コロナウイルスワクチン職域接種の看護師募集に応募し、30年ぶりに慶應看護の同窓生と仕事をしました。当初初めて顔を合わせたメンバーと現役の病院勤務の看護師をリーダーとしてのチームでしたが、疑問は率直に聞き改善策を提案して皆で考える、相手の動きをみながら阿吽の呼吸で動く等、とても動きやすかったです。同じ基礎を学んだ人同士のつながりを実感し嬉しく思いました。

最後に、後任の事務の方は事務能力もあり現代のネット事情にも通じている方なので、今の時代に合った同窓会の運営をしていただけると思っています。

68回生 浅田 頼子



東京オリンピックを経験して

一生に一度の体験

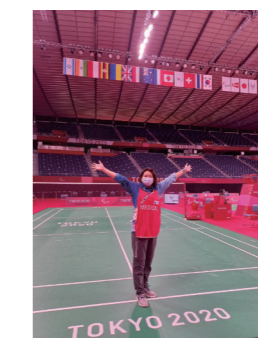
東京オリンピック・パラリンピック開催が決定した時から、大会に関わるボランティア活動がしたいと考え、様々なスポーツボランティア活動に参加してきました。そんな私にとって、今年の夏は忘れられない思い出となっています。

東京2020オリンピック・パラリンピックでは、各会場や選手村に仮設の診療所が設けられ、その各々に医師、看護師、理学療法士、スポーツトレーナー等の資格を持ったボランティアが集まり、即席のチームを作って活動にあたっていました。コロナ禍の開催となり、予定していた医療従事者の都合がつかず人員不足となった為、急遽私は活動日数を増やし合計28日間様々な会場に向かいました。



短2回生 儀賀 亜紀子 (旧姓浅田)

サポートした競技は3×3バスケットボール、ビーチバレー、ハンドボール、スポーツクライミング、トライアスロン、車いすラグビー、車いすバドミントン、パラトライアスロンです。選手用医務室では多言語対応の為にポкетークが準備されており、英語が不得意な私でもどうか意思疎通を図ることができ、文明の利器があれば怖くない!と、ホッと一安心でした。また競技会場の救急対応では、倒れ込む選手を2分以内にカメラの前から搬送することが重要なミッションだったので、毎日毎日スクープストレッチャー操作とネックカラー装着、蘇生練習を繰り返していました。医療現場から長く離



れていた身としては、現役世代の若いナースやドクターに実習しながら指導していただき、緊張感を持った活動となりました。

世界レベルの大会で医療者として活動する…こんな体験一生に一度! 参加できて幸せでした。

TOKYO2020オリンピック・パラリンピック大会での医療活動

学10回生 石川 恵理香

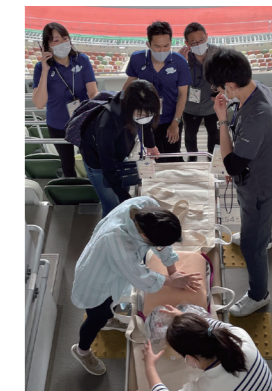
新型コロナウイルス感染症の流行により1年延期となったTOKYO2020オリンピック・パラリンピック大会。慶應義塾大学病院は国立競技場の医務室を担当し、私も参加しました。

TOKYO2020大会での医療活動に向けて、ICEM(Immediate Care in Event Medicine)というイベント医療の訓練を受けました。看護師は傷病者の発生連絡を受け、最初に傷病者に接触するCoding Nurseという役割を担いました。傷病者の状況を判断し、初期対応をしながら、医療チームと必要物資の要請をいち早く伝える必要があります。

大会前の現地研修では有観客を想定し、大きな音が鳴り響く広い会場で、無線で連絡をとりました。会場では、短くわかりやすい伝達、的確な場所の説明、速やかな搬送のために周囲の観客を誘導して搬送経路を確保することが求められます。実際に、無線の使い方や場所の伝達がうまくいかず医療チームの到着に時間がかかったり、傷病者の状況が理解できず必要な搬送物資がよくわからない等、情報共有の困難さが浮き彫りとなりました。

また、国立競技場の近隣病院である慶應義塾大学病院の取り組みとして、テロやCBRNE災害等による多数傷病者の発生に対応できるよう、開催前の7月には実際に救急外来前で除染テントの設営訓練や防護具の着脱訓練、救急外来の搬入の確認も行いました。

TOKYO2020大会では無観客開催となったため、大きな傷病が発生することはありませんでした。通常の医療でも同じですが、大規模イベントではいち早く医療を提供するために、医療チームが的確な連絡を密に取り合うだけでなく、近隣病院の受け入れ体制も整備し会場での医療を枯渇させないことが重要であると感じた経験でした。



2022年度紅梅会総会、研修会について

新型コロナウイルス(COVID-19)感染症が拡大し第6波となり、今後が見通せない状況です。総会は昨年度と同様に書面総会とし、研修会は中止としました。書面総会の資料は5月中旬頃にお送りします。